

参考文献

1. 連語についての中国語の術語はさまざまあり、本稿第三項に詳しく論評する。
2. 葉蒼岑著・“現代漢語法基本知識”・132頁・北京教育出版社・1986年。
3. 何世遠主編・“現代漢語”262頁・北京大学出版社・1986年。
4. 何世達・前掲書210頁。
5. 張斌主編・“現代漢語精解”271頁・上海文芸出版社・1989年。
6. 二分法の学者：葉蒼岑前掲書133頁
三分法の学者：金天俊・“實用漢語語法与修辭”81頁：中南工業大学出版社・1988年。黃漢生・“現代漢語”67頁・書目文獻出版社・1989年。
7. 江寧著・“現代漢語語法通解”167頁・遼寧人民出版社・1980年。
8. 金天俊・前掲書84頁。
9. 黃漢生・前掲書67頁
10. 呂叔湘著・“漢語語法分析問題”72頁 商務印書館・1979年
11. 劉月華三人著・“實用現代漢語語法”279頁・外語教育与研究出版社・1986年。
12. 呂叔湘・前掲書78頁。
13. 呂叔湘・前掲書75頁。
14. 黃漢生・前掲書115頁。
15. 金天俊・前掲書147頁。
16. 胡裕樹主編・“現代漢語”341頁・上海教育出版社・1988年
何世達・前掲書196頁。
黃漢生・前掲書50頁。
17. 王力著・“中国現代語法”25頁・商務印書館・1985年
18. 朱德熙著・“語法講義”第7章以下・商務印書館・1982年。
邢福義著・“現代漢語語法知識”76頁・湖北人民出版社・1980年。
19. 江天著・“現代漢語語法通解”133頁・遼寧人民出版社・1980年。
20. 6頁・人民教育出版社中学語文教室主編・1984年2月発表。
21. 黎錦熙・劉世儒共著・“漢語語法教材”23頁・商務印書館・1957年。
22. 高更生著・“漢語語法專題研究”104頁・山東教育出版社・1990年
23. 江天・前掲書27頁。
24. 張斌・胡裕樹共著・“漢語語法研究”53頁・商務印書館・1989年。

◇注釈

1. 印刷の便利のために繁体字の中国語が使う。
2. “ ” と () の中に入れた漢字は中国語である。
「 」と ≪ ≫ の中に入れた漢字は日本語である。

を称する学者もいる。

“中学教学語法系統提要”には、連語を“短語”⁽²⁰⁾と称する。目前中国の漢語学界では、短語と称する傾向が徐々強くなっている。⁽²¹⁾ 私がこれに反対して、“詞組”と称することは適切であると思われる。その理由としては、“詞組”その文字自体がもつ意味が一目了然であるから、社会と学校の教学上に便利である。また、昔、長い時期に使用されたことでもあるし、さらに、数の少なくない“詞組”の字数は、“短語”よりもっと多いのである。一方、中国語の文法上では、文の要素を主語・述語・目的語……と称するが、“詞組”を“短語”と称すると、混同する概念が生じてくる。また、“結構”というものは、二つの意味を持ち、“構造過程”を示すし、“構造結果”も示す。“虚詞”と“実詞”との組み合わせは、“結構”と称する、“実詞”と“実詞”との組み合わせも“結構”と称する。結局、それは“結構関係”を指し、また、“結構実体”も指すので、両者の区別はなくなる。⁽²²⁾ このような意義の不明確を避けるために、“実詞”と“実詞”との組み合わせを“詞組”と称し、“実詞”と“虚詞”との組み合わせを“結構”あるいは“詞結”と称するという意見もある。しかし、“実詞”と“虚詞”の区別基準はまだ定着していないのであり、例えば、“副詞”というものは、“実詞”に属するか“虚詞”に属するか、論争まだ存在している。異なる基準によると、“副詞”と“実詞”との組み合わせるものは、“詞組”と称するか“結構”⁽²³⁾と称するか、問題は一層複雑化すると思う。

文の要素の分類は、文の要素の分析法（句子

成分分析法）に欠くことはできないものである。

学者は、文の要素（句子成分）以外に、また要素の要素（句法成分）があると言われるが、主語と述語は文の要素であり、その他の目的語・限定語・状況語・補語は文の要素ではなくて、文の要素以外のもので、即ち、要素の中の要素である。文の要素を分析する場合には、“句子分析”と言われて、文の要素の要素を分析する場合には、“句法分析”あるいは“詞組分析”⁽²⁴⁾と言われる。これと似ている例を上げれば、車のエンジンとフレームだけは車の構成部品として認め、その他の部品は、車の部品と認めず、部品の中の部品として考えられる。果して、このような分類はよいか否かが今後中国語学界の論究が必要となろう。

四、結 論

書面上の文章か会話上の言葉かを問わずに、正確な文法である文を用いるならば、意思内容は完璧に表わすことができる。しかし、こうした文の成立は、まず正しい文型の確立は、前提として必要である。文型の正確か否かが文型の分析に対する欠くことのできないことである。文型を分析するときには、文の要素の正確分類が大変重要なことであると思う。前述したように、文の要素になれる連語（詞組）の統一使用及び文の要素の五種類の分類と同位語・独立語の存在を私はこれらを認めたいのである。

後に置かれる。

(e) 特殊要素

(1) 同位語

同一の人あるいは事物を示す二つの単語または連語は、文の特殊な要素として、同位語といわれる。同位語は同時に文の中で共通な主語・目的語または他の文の要素になれる。他の文の要素とは、文の中の限定語、介賓連語の後にある補語または状況語。同位語は文の中で同時に兩個の要素が並列しているが、その中の一つの要素は文の要素で、もう一つの要素は文の要素として認めない学者もいる。⁽¹⁴⁾

同位語は文の中に占めている地位によって、さまざまな役割りを演じる。例えば、文の中にある要素が持つ意義を強調するか、あるいは文の重点のところを示すためか、または主語・限定語・目的語などが文法上特に複雑になるときはそれを簡化させることがある。同位語は文の中に表わす方法によって、大抵兩種類に分けられる。同位語の中の一つは文頭に置かれて、もう一つは文の中に適当な場所に置かれて、一般に代詞でこれを示す。これは“指代式同位語”と称する。一方、文の中に置かれている同位語は分説の役割りを果して、他の場所に置かれている。もう一つの同位語は総説の役割りを加担する、即ち、二つの同位語は総論と各論との関係を持つ、このような同位語は“総分式同位語”と称する。総分式同位語は、連合連語または偏正連語によって構成されるが、主述連語がこれに代ると、“総分復句”の“分句”になる。⁽¹⁵⁾

(2) 独立語

独立語とは、独自に文の中に挿入する要素である。一つの文の中にある独立語が、独立して存在していて、他の要素との間には、いかなる関係も生じていない。独立語は文の構造上に必要な要素ではないし、接続詞の役割りにも加担しないで、ただある程度の補充・注釈の役割りを演じる。そのゆえに、独立語を削除しても文の全体構造は崩されない。

同位語の主要な役割りは、次のようなことがある：

1. 相手《文章の場合は読者、会話の場合は聞き手》の注意を促す。
2. あいさつ・応答・感嘆を者わす。
3. 情況の判断・分析・予測を示す。
4. 伝聞の根拠を示す。
5. 自己の信念を示す。
6. 解釈・まとめ・排除・示例・強調を示す。
7. 道理を帰納することを示す。
8. 順序を示す。
9. 擬声を表わす。

多くの学者は、同位語と独立語を文の要素として認めないが、私はやはりこれらを特殊な要素として認めた方がよいと思う、その理由としては、上記のように同位語と独立語が文の中にもさまざまな役割りを演じて、文意の表現に対する一定の価値が存在しているからである。

三、連語と文の要素

連語を示す中国語の術語はいくつかの言葉があり、例えば“暫擬漢語教学語法系統”の中で、“詞組”と称する。これを認めた学者が⁽¹⁶⁾いる。しかし、“⁽¹⁷⁾仿語”、“⁽¹⁸⁾結構”、“⁽¹⁹⁾詞結”、など

2. 言葉の重複使用を避けるとき、
3. 読者または聞き手に利便させるとき、
4. 後文が前文と特別な接続関係が生じるとき、
5. 状況語が複数の短文（分句）を修飾するとき、

状況語の後には、通常構造助詞“地”が用いられるので、“地”字は状況語のしるしといわれている。しかし、すべての状況語のうしろに必ず「的」が用いられる訳ではない。

下記のようなことによって、“的”を加えない。

1. 単音節の形容詞または単音節の副詞《程度を示すもの》が状況語になるとき、
2. 時間詞と場所詞が状況語になるとき、
3. 時間・場所・性状・方式を表わす疑問代詞が状況語になるとき、
4. 介賓連語、方位連語が状況語になるとき。
5. 数量詞が状況語になるとき。

(d) 補充要素：補語

動詞あるいは形容詞の後であって、動詞あるいは形容詞を補充・説明し、動作の情況・結果・数量・時間や性状の程度を表わすものを補語と言う。いままで補語は主語補語と目的語の補語を二種類に分けたが⁽¹³⁾。現在いわれている補語とは、目的語の補語に近いものと思う。

補語になれるものは、形容詞・動詞・数量詞・副詞及び代詞である。また、連合連語・動賓連語・主述連語・補充連語・偏正連語及び介詞連語が補語にもなる。補語は述語との間には、複雑な関係を持ち、それによって、結果補語・状態補語・程度補語・方向補語・可能補語・数量補語・時間補語及び介詞連語補語などの数種類に分けられる、補語の前に構造助詞“得”を必

ず用いなければならないのは、下記のような場合である。

1. 補語が副詞“很”と代詞「どのように」、「このように」であるとき、
2. 補語が重複型の形容詞であるとき、
3. 修飾性質を持つ形容詞と動詞が補語になるとき、
4. 動賓連語と主述連語が補語になるとき、

補語と目的語は共に動詞の後に置かれるが、常に区別しにくいのである。補語は主として動作に対して補充説明を加えるものであり、数量補語を除いて、その多くは非体詞性である。

一方、目的語は一般に動作が及ぶ対象を言い、多くは体詞性である。補語の後には、一般に動量詞（例えば“一回、三遍”）を用いて、目的語の後には、通常物量詞（例えば“三本、一冊”）を用いる。また、介詞連語は補語だけになって、目的語になれない。疑問代詞以外の代詞あるいは名詞は補語になれず、目的語になれるのである。

動詞が補語と目的語を同時に持った場合、この二つの要素の位については、次の通りで決まる。

1. 補語が動詞・形容詞で、結果を示すときに、一般に目的語の前に置かれる。
2. 可能性を示す補語は、殆んど目的語の前に置かれる。
3. 数量詞が補語で、目的語が名詞である場合には、一般に目的語は補語の後に置かれるのである。
4. 人称代詞が目的語になる時は、数量補語の前に置かれる。物を示す目的語は数量補語の

の二種類に分けられる。前者は数量・時間・場所・範囲・帰属・支配関係などの面から中心語を限定する。後者は性質・状態・特徴・用途・材料・職業などの面から中心語を描写する。即ち、前者は同種類の中にあるものを特定して、他の同種類のものと区別させる。後者はただ中心語を修飾する。特定する目的は持っていない。⁽¹¹⁾

品詞の中には、限定語になれるものは、名詞・代詞・形容詞・数詞・量詞及び動詞がある。その他に、連合連語・偏正連語・動賓連語及び主述連語などが限定語にもなれる。限定語は一般に中心語の前に置かれるが、補充説明または多数限定語の一極集中を避けるために、それを中心語の後に置くことは必要である。限定語の後には、構造助詞“的”を用いる場合が多いので、“的”の字は限定語のしるしと言われている。即ち、限定語＋“的”＋中心語、あるいは中心語＋限定語＋“的”＋限定語＋“的”などの文型になる。しかし、例外的に限定語の後は“的”を使わない場合もあり、それは下記のようなことである。

1. 数詞・量詞が限定語になって、制限関係を示す。例えば：“一条街”。
2. 数詞の“一”が重ね型の量詞と一緒に限定語になる。例えば、“一件件衣服”。
3. 重ね型量詞が限定語になる。例えば、“一寸寸土地”。
4. 指示代詞あるいは疑問代詞が限定語になり、または、それらは数詞・量詞と組んで限定語になる。
5. 中心語は方位詞で、あるいは人を呼称する

言葉または団体・機関を表わすものである。

6. 中心語が方位詞で、名詞が限定語になる。
7. 描写の役割りを持つ名詞が限定語になる。
8. 単音節の形容詞が限定語になる。
9. 限定語が後の中心語と連結して連語になる。
10. “很多、好多、許多、不少”などの形容詞連語が限定語になる。

文の内容をもっと具体的に、正確的に、リアル的に表わすために、人は常に限定語を使わなければならないのである。これは限定語が文の修飾要素として存在する価値である。

(2) 状況語 動詞あるいは形容詞の前にあって、動詞あるいは形容詞を修飾・限定して、動作の状態・方式・時間・場所あるいは性状の程度を示すものを状況語と言う。状況語に修飾された文の要素は中心語と称する。状況語は中心語との関係によって、限定性状況語と描写性状況語に分けられる。前者は、時間・場所・方向・範囲・程度・数量・目的・根拠・対象・状態・肯定・否定・重複などの面から中心語を限定する。後者は、中心語に情況または方式を描写する。⁽¹²⁾

副詞・形容詞・代詞・数詞・量詞及び名詞など品詞が状況語になれる。また、連合連語、主述連語、動賓連語、偏正連語及び介詞連語も状況語になれる。これらの単語、連語は、通常述語の前に置かれるが、文の内容を補充・説明するために、文末に置かれることもあり得る。このような状況語は“后置状況語”と称する。一方、下記のようなことによって、状況語を文頭に置くこともできる。

1. 時間または場所を強調するとき、

なる。

述語として用いられるものは、代詞・数詞・量詞など単語以外、連合連語（聯合詞組）・主述連語（主謂詞組）・偏正連語（偏正詞組）及び動賓連語（動賓詞組）など連語がある。

次に、主語になれるものは、名詞・代詞・数詞・量詞・動詞及び形容詞などがあり、即ち、七種類の実詞の中に副詞を除いて、その他の実詞は主語になれるものである。しかし動詞と形容詞は直接に主語として使った時に、その述語は通常“是、使、有、開始、停止、進行”など動詞または形容詞を用いる。⁸⁾また、連合連語・主述連語・動賓連語・偏正連語・述補連語・同位連語・方位連語及び“的”字連語などにも主語になれる。

(b) 連帶要素

以前目的語（賓語）は中国語で“目的格”と称された。学者はこれを中国語の文の主要要素として認めたが⁹⁾ 実に目的語は単なる動詞の連帶物としてしか認めない、その理由は、若干の文はただ主語と述語（自動詞または形容詞）を持っても文になれるのである。目的語は主語と互に対応する要素ではなくて、述語の動詞に対して言われるものである。つまり目的語は動詞の連帶要素であり、動詞の影響の及ぶ対象であり、動詞の支配を受けて、動詞に示された動作、行為をより具体的に、明確にさせる。従って、目的語は連帶要素として考えた方がよいと思われる。¹⁰⁾動詞は二つの目的語を伴う場合、一般に一つが人を指し、他の一つは事物を指し示す、前者は間接目的語と言ひ、後者は直接目的語を言う。目的語は動詞との関係は多種多様で

あり、例えば、動作・行為の対象・結果・場所・方向・原因・目的を示し、または存在・出現・消失する事物または人を表わす。学者は常に三種類を分けて考える、即ち受事目的語、施事目的語及び中性目的語などがある。

目的語になれるものは、名詞・代詞・量詞・動詞と形容詞などの単語及び連合連語、動賓連語、同位連語、介詞連語、主述連語、“的”字連語と兼語連語などがある。主述連語の目的語と兼語連語の目的語は、常に区別しにくいのである。しかし、前者の動詞は、大抵心理活動を表し、感覚・説明など意味をもつものであり、例えば、“希望、覺得、值得、認為、相信、同意、發現、知道、看見、証明、說”など単語を用いる。兼語連語が目的語として使うときに、使役動詞を使って、その後の代詞または名詞に対する相応的な役割りを果す。一方、主述連語が目的語として使うときには、その目的語は全文の目的語として認めなければならないのであり、即ち、全文は主語＋目的語（主語＋述語）の文型になる。

(c) 修飾要素

(1) 限定語：名詞の前であって、それを修飾・限定し、人または事物の性状・数量・所属などを表わすものを限定語（定語）と言う。限定語に修飾されるものは主語と目的語であるが、動詞または形容詞が主語あるいは目的語になる場合には、その修飾語にも限定語である。固有名詞や人称代詞を限定語につけることは比較的に少ない。限定語に修飾された文の要素は、中心語と言われる。限定語と中心語の関係は複雑であるが、一般的に限定性限定語と描写性限定語

は連語を用いて完璧な文にするときでもできる。一方、音声の面から見ると、それぞれの文はいつもさまざまな声調を持ち、会話方式で表わすときに、文と文の間により長いとまる時間をとって、聞き手に文の内容を理解させる。もし書面で文を表わすときには、特定の句読符号“。”“?”“!”及び語気助詞を使わなければならない。⁽⁴⁾

単語または連語を用いて、前述したような要件を持ち、文の長短を問わずに正しい文ができる上がる。

二、文の要素

(A) 意義 文は単語また連語によって構成されるものである。語学界ではこの単語または連語は文の要素(句子成分)と称する。単語または連語は“文の要素”の資格によって、一つの文の中に、一定の地位を占め、一定の役割りを果し、さらに他の文の要素との間にさまざまな関係が生ずる。中国語では、それぞれの単語または連語を主語、述語(謂語)、目的語(賓語)、限定語(定語)、状況語(状語)などと称する。学者の間に主語と述語だけが文の構成要素として認め、その他の文の要素は文の構成要素として認めない人もいる。この問題については本稿第三項に論評する。⁽⁵⁾

現代中国語では、それぞれの構成要素が文の中に占めている地位、果している役割り及びその相互関係などに基づいて、五種類の成分に分けることができる。⁽⁶⁾

(B) 分類

(a) 主要要素

主語と述語は文の主要要素であり、基本要素とも言われる。一つの文はこの二つ要素にささえられる。まるで樹の幹と枝のような形になり、この二つのものが欠かせないのである。その他のものはこの二つのものに附属する。

主語は陳述の対象であり、つまり「誰」、「なに」を示し、述語は同一文章の主語に対して陳述し、即ち、「なにですか」、「いかがですか」に対して説明する。一つの文には、主語がなければ、文の内容の重点が失われる。一方、述語がなければ文の内容がはっきりにならない。主語と述語との間には密接な関係を持っている。動詞を述語にした文は、「動詞述語文」と称し、この述語は主語の指す人または事物の動作・行為・変化を述べる。その種類は単純な動詞述語文と目的語を伴う動詞述語文がある。このような文は一般に陳述文(叙述句)といわれるが、この際に述語の説明によって、主動式文(主動句)と被動式文(被動句)を分けることができる。⁽⁷⁾もし形容詞が述語になると、この文は形容詞述語文といわれる。この述語は主語の表わしている人または物が「どのようなものであるか」を述べる。もし判断詞の“是”を述語として用いる場合には、“是”は特殊な動詞で、動作・行為を表わさず、その後の目的語を連結して、主語を判断し、肯定させる役割りと果す。このような文は、中国語で“判断句”といわれる。しかし、“是”を述語として用いて、その後の目的語は名詞の性質を持つときに、“是”は常に省略された、その目的語は述語に変わった、文法上では、この文を「名詞述語文」といわれる。例えば“今天是星期三”から“今天星期三”に

現代中国語の文の要素について

江 林 英 基

The Sentence Elements of contemporary Chinese

Hidemoto Korin

一、文 (sentence) の定義

文とは単語 (詞) または連語 (詞組) を用いて、一定の構造関係に基づいて、相対的にととのった意味を表わし、一定の語調をもった言語単位である。⁽¹⁾

文の内部構造から見ると、原則として、一つの文は二つ以上の単語または連語によって構成される。その単語または連語は文の構成要素である。つまり文の成立に対する必要な材料である。学者は文の成立前にこれを“予備単位”または“静態単位”と称する。一方、一旦二つ以上の単語または連語を用いて、文になると人と人との間に文通や会話ができてくる、学者はこれを“使用単位”または“動態単位”と称する。⁽²⁾

一定の構造関係とは、構造規則または構造とも言われた。これは、単語または連語から文に構成する方式を指す、いい換えれば文型の構造にも言える。文の構造関係は一定の規則があり、この規則に従って、つくられた文は正しい文

(正句) と称するが、規則に従わない文は正しくない文 (病句) と言われる。⁽³⁾

文の内容から見ると、一つの文は一つの“相対的にととのった意味”を表わす単位である。相対的にととのった意味とは、絶対的にととのった意味とを区別するものである。現代中国では文だけで完璧に意味を表わせない場合もあるが、その際に、文を表わす時間や環境の助力を得なければならないのである。例えば、主語を持っていない「無主文」(無主句) または文の構造関係を簡略した、ただ一つの単語または連語によって構成された「一語文」(単語句) は、文の内容を表わすときに、前の文章やまわりの環境や時間との関連性などを利用しなければ文の内容を完璧に表現されないのである。その場合には聞き手または読者は文の内容を理解できない。しかし大部分の中国語の文は、絶対的にととのった意思を表わす文である。つまり、文を表わすときに、前の文章との連貫性を持たずまわりの環境との関連性も無視し、単に単語また